

敦子とラーメ



mikatu198

敦子の中には、チャーシューと言えばラーメン・ラーメンと言えばチャーシュー、と言うリバーシブル的合言葉がずっと潜在している。

ところが、とあるラーメン屋で頼んだ〈わかめラーメン〉にはチャーシューが入っていなかった。敦子にとって〈わかめラーメン〉だからチャーシューが入ってないのね？ という了解は無い。仮に了解したとしても、わかめが入るだけで素ラーメンよりも150円も高いのだから、納得がいかない。いや、実際150円も高いという事実は注文してしまった後で気が付いたことで、値段の差に先に気が付いていれば〈わかめラーメン〉を注文していなかったかもしれない。兎に角、〈わかめラーメン〉を目の前に出されるまでは、何処のラーメンも全てチャーシューが入っていると信じ切っていたし、もしかしたらチャーシューは入ってないかも、という想定は敦子には無かった。

それが今、敦子の目の前に出された〈わかめラーメン〉には、幾ら探しても未だ伸び切っていないヨレヨレのわかめの他に、何故か大量の木耳と葱がうっとうしいくらいに入っているだけで、チャーシューの欠片も見当たらない。

敦子は出された〈わかめラーメン〉を前に考え込んだ。

『う～ん、わかめラーメンを頼んだのは失敗だったかも…… かとって、もしかしたらココの店には素ラーメンにもチャーシューは入っていないかもしれないし、きっとこんな風に大量の木耳と葱で麺が覆われているのかもしれない…… う～ん』

木耳も葱も好きな敦子ではあったが、木耳ラーメンでも葱ラーメンでもないのに、ここまで大量に入れる店主のセンスを疑いつつスープを蓮華で一口飲んだ。

『うっ、塩辛い……』

どうも塩蔵わかめを水で完全に戻らないうちにラーメンに入れてしまったようだ。もしかしたら、この塩辛さからすると付着している塩だけをざっと洗い流しただけなのかもしれない。

『……どうりで、わかめがヨレヨレだと思った』

しかし渋々だが〈塩辛木耳葱わかめラーメン〉と名付けたくなるようなラーメンを敦子はちゃんと平らげた。

実はカウンター席に座っている敦子の目の前に店主が居て、何やらごそごと作業をしていたので食べることを途中で止めるのも気が引けたし、それに何と言っても残すのは勿体無いことだ、と同居している祖母の煌（こう）に常日頃から煩く言われていたからだ。

ところで、敦子と言う名前は「あつこ」と読み、祖母のたつての希望で、自分の遠い祖先の地である中国の地名「敦煌」の「敦」と自分の名前の「煌」に因んだ名前を付けた。そして家族からは「あーちゃん」と呼ばれていたのが、学校の授業で〈敦煌はシルクロードの分岐点〉だと学んだクラスの友人たちが、ふざけて敦子のことを「トンコ」と呼んだのを切っ掛けに、いつの間にか周りの人間全員が敦子をトンコと呼ぶようになった。

その頃からだろうか？ トンコ、いや敦子が豚肉を殆ど食べなくなってしまったのは。と言うのも、トンコ・トンコと呼ばれるに連れ、頭の中にトンならぬ豚の姿が浮かび、豚そのものに愛

着が湧いて来たのだ。それ以来何となく豚グッズも集めるようにもなった。実は小銭入れも豚の顔の形をした物だったりする。なので、豚肉を食べることは、まるで自分の分身を食べるような気さえ起こってしまっていた。

そんな敦子だが、実は大好きなラーメンとそれに付随するチャーシューだけは食べ続けていた。敦子にとってのラーメンとは、適量の葱・木耳・白胡麻・そしてチャーシューがトッピングの王道なのだ。其処へわかめやコーンやもやしを追加されても許されるが、定番のトッピングが無ければ最早ラーメンと言ひ難い程に拘りがある。従ってある意味、今回の〈わかめラーメン〉のように基本のトッピングである木耳や葱が多すぎるのもタブーなのだ。しかもチャーシューが無いとなると最早、論外だ。つまり、そのラーメンを美味しいラーメンはと認めず、そのラーメン屋には二度と行かない敦子なのだ。

さて、〈わかめラーメン〉事件から約一年後のこと。敦子は再び衝撃のラーメンに旅先で出会った。行った先は仕事の都合でたまに訪れる四国は香川県だ。香川県と言えば、讃岐うどんと相場が決まっているが、ラーメン好きの敦子にとって、どんなに有名で美味しいとされる食べ物でもランクは2位以下に配置され、ラーメン店があれば其処で腹ごしらえをしてしまう習性がある。

敦子は現地に到着した昨夜も、ホテルにチェックインする前にこのラーメン屋で素ラーメンを食べていた。しかしその時は特に問題は無かった。強いて言えば白胡麻がトッピングに無かった上にテーブルにも用意されていなかったが、そこは敦子の許容範囲だ。それに加え少し気になったのは、乗っていたチャーシューがやけに脂身が多くて薄っぺらだったことくらいだろうか。

翌日、敦子は帰りにもう一度そのラーメン屋に寄って食べて帰ろうと思った。

『今度いつ、ココに来れるか分からないしね』

もう一度立ち寄ろうと思ったからには、それなりに美味しいと思ったからだ。それにこの日は朝からずっと忙しくて昼食も食べていなかったの、夕刻には可也お腹が空いていた。

『はあ～ お腹空いたなあ～ ラーメン、未だ来ないかなあ～』

店に入った時間が夕方近かったので客も少なく、さほど待たされている訳でもないが、お腹が空いていると3分が5分、5分が10分を感じることもある。この日もラーメンを作っている店員の動きを逐一目で追いながら、今か今かと注文した素ラーメンが出来るのを待っていた。

『うは、ヤバ！ 涎が出て来た』

そう思って口に溜まった唾液を飲み込むや、店長らしき男がカウンター席の敦子の目の前にラーメンの丼を置いた。

「お待ちどうさま！ ごゆっくりどうぞ」

丼からゆらゆらと立ち昇る湯気にほっかりと顔がほころぶ敦子。割り箸を割り、湯気の中に神を見ているかのように、箸を握ったまま合掌して軽く会釈をした。

「いただきまーす」

小さいけれど嬉しそうな声で言った。と、次の瞬間、丼を覗き込んだまま敦子の顔がフリーズ

した。

『うは！ 何これ？ チャーシューの量が凄くない！？ しかも脂身の少ない肉色の美味しそうなチャーシューばかりじゃない？ ……でも、何で？』

敦子はチャーシューがてんこ盛りになっているラーメン見て、物凄い勢いで妄想し始めた。『確か昨日の夜、この店で食べた素ラーメンには、脂身ばかりの白くて薄っぺらいチャーシューが申し訳程度にちょろっと乗ってただけだよな？ で、ここに来たのも昨日が初めてだったし、それがこの店のチャーシューなんだろうなって、一応納得したよね？ でも、麺もスープも私的にはOKだったし、だから今日来たんだし…… それにしても、昨日と今日で、このチャーシューの質と量の違いは一体何！？』

疑惑が渦巻く中、いつもズルズルと軽快に音を立てて食べている勢いも何処へやら。ぐずぐずしていると麺が伸びて不味くなってしまうことも忘れたように、敦子の箸は中々進まない。敦子は時々、疑惑の原因が何処かにあるかも、と思いながら店内をチラチラと見回していた。

すると、ラーメンを作ってくれた店長らしき男から少し離れ、カウンターの一番隅っこの方で無表情に突っ立っている女の姿が敦子の視界に入った。

『あ！ 昨夜、私にラーメンを作ってくれた女だ』

この時敦子に、昨夜と今日のチャーシューの違いに関する一つの理由が閃いた。

『そっか！ 昨夜の素ラーメンは、客に無愛想な店員が、この客には脂身ばかりの残り物のようなチャーシューで上等だ！ という気持ちで出され、今日の素ラーメンは客に好意的な店長が、このお客様にはまた来て欲しいので美味しいチャーシューをたっぷりサービスしてあげよう、という気持ちで出されたのだ』

何とも単純で、しかもチョット下世話な発想だが、敦子は自分の中で妙に納得出来たので、やっとスッキリとした気分に残りの麺とスープ、そしてたっぷりのチャーシューを平らげた。

とは言え、実は清算するまで敦子は不安で一杯だった。何故なら、素ラーメンを頼んだつもりが、もしかしたら注文を聞き間違えられて＜チャーシュー麺＞を出されたのかもしれない。それを確認するにも、この店にはレシートは無い。

敦子が「トンコ」になって以来、何故かチャーシュー麺だけは食べないで居た。勿論、ラーメンのトッピングの王道としてのチャーシューは欠かせない存在だ。しかしチャーシューが前面に出て主張してくるチャーシュー麺は、豚肉を食さなくなった敦子にとって物凄く豚肉を意識させる物なのだ。そこら辺の微妙な心の揺らぎは敦子にしか分からない感覚でもあった。

『……チャーシュー麺でしたね。650円です！ とか言われたらどうしよう……』

単純な推理で一度は疑惑も吹っ切れ、ご機嫌に完食した敦子だった。しかし、素ラーメンの550円より100円高いから困るという訳でもないのに、＜おしながき＞でチャーシュー麺の値段を確かめると＜6＞という数字が目に入って来て、急に鼓動が早くなった。

『どうしよ、どうしよ…… うう、豚ちゃ〜ん』

敦子はバッグから豚顔の小銭入れを取り出すと、その顔を祈るように見つめた。するとピンク色した小銭入れの豚ちゃんがニコリと目を細めて言った。

『トンコちゃん、大丈夫だよ。きっと神様のご褒美だよ^^』

『わぁ～～～ん、豚ちゃ～ん』

勿論、小銭入れが喋る筈も無いから、敦子の妄想に過ぎない。しかし豚ちゃんから受けたテレパシーに勇気を得たのか、敦子は旅行用の重いボストンバッグを抱え席から意を決したように勢い良く立ち上がると、潔くレジへと向った。そしてチラリと顔を上げレジの前に立って待っていてくれた店長らしき男の言葉を、神からの啓示のように神妙に待った。そして……

「ラーメンでしたね。 550円です♪」

店内に響き渡る<ラーメン>という言葉。<6>ではなく<5>という数字。敦子は呪縛から解き放たれたような開放感を味わいつつ、チャーシューで一杯になったお腹の底から嬉しさが込み上げて来るのを感じていた。

『嗚呼！ 思えば昨夜私にラーメンを出した女は、最初から最後まで無味乾燥な表情でそっけない言葉使いだっただな…… そして今日も憮然とした顔で店の隅っこに突っ立ってて、いらっしゃいませの言葉も無ければコチラを見向きもしないし…… でも、そんなの関係ない！ だって今の私の幸福感が全てを許しちゃうもの。ね、店長♪』

「ありがとうございました！またどうぞ♪」

男の明るく爽やかな声を受け、敦子はクルリと振り返ると小さく微笑み返した。

「ごちそうさま♪」

『また来ます♪』

心の中でそっと呟き、敦子は晴れやかな気持ちで店の暖簾をくぐり外へ出た。そして既に夕焼け色に染まっている外の空気を、豚のような大きな鼻の穴を開けて吸い込むと、思いっきりの笑顔を香川県の空へ向けた。それから小銭入れのピンクの豚に声を掛けた。

「ホントだったね^^ 豚ちゃんの言うとおりに♪」

うどん屋は到る所に存在しているこの県で敦子が出会った貴重なラーメン屋。ラーメンに白胡麻は乗っていなかったけど、チャーシュー麺のようにチャーシューが多すぎたけど、小気味いい店長の笑顔がたまらなく美味しかった。

「旅先のラーメン屋もイイね♪」

豚を愛しみ、豚を食することに微かな哀愁を感じながらも、ラーメンに乗っているチャーシューだけは食さずにはいられない敦子。半年後、再びこの地を訪れこのラーメン屋に立ち寄った時、其処が既に駐車場に変わってしまっていたという現実、更なる哀愁を感じた敦子であった。

了